

Covid-19禍における高齢者看護学実習の試み －高齢者にオンラインで健康教育を実施した看護学生の学び－

菊池 真弓¹⁾, 根本 友子¹⁾, 越智 美智子¹⁾

了徳寺大学・健康科学部・看護学科¹⁾

要旨

本研究の目的は、Covid-19禍の高齢者看護学実習において、地域で生活する高齢者にグループでオンラインインタビューを行い、高齢者へ健康教育を実施した看護学生の学びを明らかにすることである。看護学生の実習記録やレポートを質的に分析した結果、【高齢者とのコミュニケーションスキルの理解】【地域で生活する高齢者の理解】【高齢者看護に対する理解】の3つの学びが形成された。コロナウィルスの急激な感染の拡大による代替え実習ではあるが、看護学生はオンラインで高齢者とコミュニケーションをはかり、高齢者の生き方や価値観に触れ地域で暮らす高齢者について理解する機会や、情報通信技術(ICT)を活用し学生の思考を育てる機会となっていた事がわかった。

キーワード: コロナ禍 高齢者看護学実習 健康教育

Trial of geriatric nursing practicum in covid-19 -Learning of nursing students who provided online health education to the elderly-

Mayumi Kikuchi¹⁾, Tomoko Nemoto¹⁾, Michiko Ochi¹⁾

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Ryotokuji University¹⁾

Abstract

The purpose of this study was to clarify the learning of nursing students who conducted health education for the elderly by conducting online interviews in groups with elderly people living in the community during the Covid-19 pandemic of geriatric nursing practice. As a result of qualitative analysis of training records and reports of nursing students, three learnings were formed: [understanding of communication skills with the elderly], [understanding of elderly people living in the community], and [understanding of geriatric nursing]. Although it is an alternative practice due to the rapid spread of coronavirus infection, nursing students will have the opportunity to communicate with the elderly online, experience the way of life and values of the elderly, and understand the elderly living in the community. It turned out that it was an opportunity to use information and communication technology to nurture students' thinking.

Keywords: Corona Damages, Elderly, Nursing Practice, health education

I. はじめに

新型コロナウイルス感染症(Covid-19)の世界的流行により様々な社会活動が制限され、看護学教育においても授業方法や臨地実習の方法が変更するなど学習活動に多大な影響が生じた。そのような中、2020年2月28日付で文部科学省及び厚生労働省から「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」¹⁾が通達され、この通達では「実習施設の変更を検討したにもかかわらず、実習施設の確保が困難である場合には、実情を踏まえ実習に変えて演習または、学内

実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えないこと」と示された。この通達を受け、本学においても2020年度は実習施設と連携し指導者からオンラインで施設のオリエンテーションを受け、高齢者とオンラインでコミュニケーションを図り、知り得た情報からアセスメントを行い看護過程の展開をする実習方法へと変更を行った。

しかし2022年1月の新型コロナウイルス第6波とされる感染拡大により²⁾、上記の実習の展開も困難な状況となった。高齢者看護学実習は多様な場で生活する高齢者や、施設に入居している高齢者を看護の対象としているため、高齢者の免疫力の低下による感染拡大のリスクや看護学生の安全を確保しつつも、実際の高齢者と関わる機会と学生の学びを確保する実習方法を模索した。その結果、地域在住の高齢者にグループでオンラインインタビューを実施し、収集した情報から生活上の課題を検討し、高齢者へオンラインで健康教育を実施するという実習方法に変更した。

今後感染の状況により高齢者看護学の臨地実習が影響を受ける可能性を踏まえ、今回の試みを振り返り、学生の学びと今後の課題を明らかにすることは意義深いと考えここに報告する。

Ⅱ. 研究目的

本研究の目的は、Covid-19禍の高齢者看護学実習において、地域で生活する高齢者にグループでオンラインインタビューを行い、高齢者へ健康教育を実施した看護学生の学びを明らかにすることである。

Ⅲ. 研究方法

1. 用語の定義

学び：単なる知識の習得ではなく、看護学生が体験した事実に対して既習の知識などの根拠を用いて解釈した考察から得られる気づきや見解を含む自己の考えとした。

2. 研究対象者

2022年1月から2月に高齢者看護学実習Ⅱにおいて、高齢者に健康教育を行った看護学生54名のうち、研究の趣旨を十分に理解し研究参加の同意が得られた25名の記録物を研究対象とした。

3. データ収集方法

研究参加の同意が得られた看護学生の、オンラインインタビューと健康教育を実施した実習日の行動記録および課題レポート「高齢者看護学実習Ⅱで学んだこと」から内容分析を行った。

4. データ分析方法

看護学生の学びに該当する記述内容を可能な限り忠実に抽出し、記録単位としてコード化した。学びの記述は単語や一文では理解しづらく、ある程度の文脈を通して理解できることから文脈単位での抽出とした。その後、コードの意味内容を類似性に従ってサブカテゴリ化、カテゴリ化と抽象度を高めて分類し命名した。また、分類された記録単位を算出した。分類は研究者間で意見交換を交換しながら、信用性や確証性などの妥当性の各話に努めた。

5. 倫理的配慮

2022年1月から2月に高齢者看護学実習Ⅱを行った看護学生のみが研究対象者である。研究対象者には

高齢者看護学実習Ⅱの単位認定は終了していること、本研究への参加は自由意志であり、参加の有無による不利益は生じないことを口頭と文書で声明し、書面による同意を得た。なお、了徳寺大学倫理委員会の承認を得ている(承認番号22-10)。

Ⅳ. オンライン実習の概要

1. 高齢者看護学実習の目的・方法

本学の高齢者看護学実習はⅠとⅡで構成され、高齢者看護学実習Ⅰ、Ⅱの順で実習を行っている。

高齢者看護学実習Ⅰ(以下、実習Ⅰとする)においては「地域や施設など多様な場で生活する高齢者の特性を理解し、より良い生活支援のために必要な高齢者看護の知識・技術・態度を修得する」事を目的とし、病院と介護保険施設実習の2単位で構成されている。

高齢者看護学実習Ⅱ(以下、実習Ⅱとする)においては「加齢に伴う変化や健康障害により、施設で生活する高齢者とその家族の特性を理解し、より良い生活支援のために必要な看護の知識・技術・態度を修得する」事を目的とし、介護老人保健施設や介護付き有料老人ホームに入居されている高齢者を受け持ち、看護過程の展開を行う2単位の实習で構成されている。

2. 地域で生活している高齢者に、オンラインでより良い生活への健康教育を行う実習に至った経過

2022年1月は第6波とされる感染拡大により、全ての実習グループが学内実習となった。実習施設の指導者からオンラインで施設のオリエンテーションを受け、受け持ちとなる予定であった高齢者とオンラインでコミュニケーションを図り情報を収集し、利用者を生活者としてイメージしながら高齢者のアセスメントを行い、看護過程の展開行う実習方法も実習施設内での感染拡大により実施困難な状況となった。

高齢者と学生の感染を防ぎ、実際の高齢者と関わる機会と学生の学びを確保する実習方法を模索した結果、地域在住の高齢者にオンラインでインタビューを実施するという実習方法へと変更を図った。機縁法により、実習に協力してくれる高齢者に対し、4～5名の学生グループで高齢者を担当した。学生はインタビューで収集した情報から高齢者の生活上の課題を検討し、看護計画を立案しオンラインで健康教育を実施した。

3. 高齢者看護学オンライン実習(実習Ⅱ)の内容と方法

実施した実習Ⅱのスケジュール(2週間)を表1に、受け持ち高齢者一覧を表2に示す。

- 1) オンラインインタビューを依頼した高齢者(表2)に実習内容と方法を事前に説明し臨地実習と同様の書類を用いて同意を得た。高齢者に服薬情報、特定健康診査やかかりつけ医に受診した際の検査データの提供を依頼した。
- 2) 今回インタビューを依頼した高齢者は、普段からオンラインを活用している方や、初めてオンラインを利用する方などICTスキルが多様な状況であったので、教員が前日にオンラインの接続の確認テストを行い高齢者の負担感の軽減を図った。
- 3) 指導教員は高齢者の年齢から学生に受け持ち高齢者をイメージさせ、提供された服薬情報・検査データなどの客観的データから受け持ち高齢者の現在の状況についてグループカンファレンスを行った。学生によるアセスメントの展開が難しい場合には、既往歴や提供された服薬情報から教員が現在の状況のアセスメントにつながるようなアドバイスをを行い、高齢者に質問したいことを整理し、高齢者が回答しやすいような質問の順番を検討するように学生に指導した。

- 4) インタビューの最初に、学生から今回のインタビューの目的・守秘義務の説明するよう指導し、インタビューの準備段階において高齢者へ接遇や尊敬の態度について考察を促した。さらに話題の展開を促すクッション言葉や、オープン・クエスチョンとクローズド・クエスチョンを織り交ぜて聞くなどのアクティブ・リスニング(リアクション)を心がけるようにアドバイスした。
- 5) インタビューの内容はゴードンの機能的健康パターンの項目を活用し、実習目標の達成のため看護過程の展開を意識させた。
- 6) インタビューは高齢者の都合の良い時間に60分程度行った。インタビューの際はグループ内でインタビュアーを交代し、それ以外の学生は質問内容を確認するように補佐するなど全員が役割をもちインタビューを行った。
- 7) インタビュー終了後には、学生間で収集した情報の確認からアセスメントを行い、高齢者の現在の健康上の課題や今後起こりうるリスクについてカンファレンスをした。看護過程の展開の看護計画として、受け持ち高齢者の疾患に対する解説や食生活・運動などの生活管理に関する健康教育の内容を検討した。スライドの作成にあたり参考書や研究論文を活用しエビデンスを持った内容とした。
- 8) インタビューの質問内容や健康教育の為のスライド作成はGoogleドライブを活用し、自宅でも学生が同時にドキュメントやスライドの作成が行えるため、密集を避け学生間の感染を予防した。
- 9) 健康教育の内容はオンラインでGoogleスライドを使用し、一方的な説明にならないよう高齢者の反応を観察し、時折質問を行いながら高齢者の受け入れや理解の状況を確認し40分程度実施した。健康教育の終了後は、その際の高齢者の反応を基にグループカンファレンスを行い看護計画の評価とした。
- 10) 健康教育の実施後は速やかに資料を印刷し、高齢者からの質問の内容に対し調べた内容を回答文として作成した資料を添付して郵送した。
- 11) 受け持ち高齢者の数年後を想定した日常生活援助技術の演習を実施し、実習項目の評価の一つとした。

表1. 実習スケジュール

	月	火	水	木	金
第1週	高齢者看護学実習II オリエンテーション	施設オリエンテーション DVD学習〈ヘルスアセスメント〉	施設実習 対象者の疾患 内服薬調べ 情報の分析解釈	オンライン 高齢者のインタビュー インタビュー振り返り	情報の分析解釈 DVD学習〈多職種連携/社会資源〉
第2週	関連図・看護計画 受け持ち高齢者へのプレゼン準備(パンフレット作成等)	高齢者看護倫DVD 学習〈理的課題/施設内虐待・不適切なケア〉 高齢者施設における看取り	高齢者看護技術計画と実施評価	オンライン プレゼンテーション プレゼンテーション振り返り	看護計画評価 実習の学び意見交換会

表2. 受け持ち高齢者一覧

	年齢	性別	疾患名
A	67歳	女性	脂質異常症 心筋梗塞(ステント挿入後) 糖尿病
B	68歳	男性	S上結腸がん術後 心筋梗塞(ステント挿入後) 糖尿病
C	67歳	男性	心筋梗塞(バイパス術後)
D	73歳	女性	脊椎すべり症 後縦靱帯骨化症
E	66歳	女性	脂質異常症
F	66歳	男性	心筋梗塞(バイパス術後), 気管支喘息, 糖尿病, 高血圧
G	66歳	女性	心不全(カテーテル焼灼術)
H	73歳	男性	膀胱がん術後
I	68歳	女性	脂質異常症
J	73歳	男性	逆流性食道炎 脂質異常症
K	73歳	女性	慢性関節リウマチ 甲状腺機能低下症 気管支喘息

V. 結果

学生の最終レポートを質的に分析した結果、高齢者看護学実習Ⅱで学生が得た学びの記述は40コードあった。内容の類似性に沿って整理した結果、10サブカテゴリー、3カテゴリーに分類された。以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを《》コードを〔〕で示す。(表3には代表的なコードを示す)

- 1) 【高齢者とのコミュニケーションスキルの理解】は、《相手の表情や反応を確認する》《相手を尊重した言葉を使う》《伝わりやすい言葉を選択する》《他の学生のコミュニケーションから学ぶ》の4サブカテゴリーから形成した。
- 2) 【地域で生活する高齢者の理解】《高齢者の持てる強みを知る》《元気な高齢者の生活を知る》《高齢者の生活歴を知る》の3サブカテゴリーから形成した。
- 3) 【高齢者看護に対する理解】《予防的な関わり方を知る》《生活を支援する看護について知る》《グループワークで看護課程の学びを深める》の3サブカテゴリーから形成した。

VI. 考察

本来の看護学実習は「既習の知識と技術を基に、クライアントと相互作用を展開し(中略)看護実践に必要な基礎的能力を修得するという学習目標を目指す授業である⁴⁾。」と舟島が述べているように、臨地実習においては看護学生と対象者との関わりが不可欠であると考え、コロナウィルスの急激な感染拡大による急遽実習計画の策定を迫られた代替え実習ではあったが、令和元年の看護基礎教育検討会報告書⁵⁾における改正点である「コミュニケーション能力の獲得を目指す」ことや、「地域に暮らす人々の理解とそこで行われる看護について学ぶ」、「情報通信技術 (ICT) を活用するための基礎的能力を養う」を実践する結果を得ることが出来たと考える。今回のこの代替え案における看護学生の学びについて考察する。

表3. 学内実習における看護学生の学び

カテゴリ	サブカテゴリ	コード数	代表的なコード
高齢者とのコミュニケーションスキルの理解	相手の表情や反応を確認する	4	相手の表情や言動、声のトーンなどを観察する事で相手の考えや強みを理解することが出来た
			相手の発言に対して共感的な態度を取ることで、相手が話しやすいコミュニケーションを取る事が出来たと学んだ
	伝わりやすい言葉を選択する	3	伝わりやすい言葉の選択や言葉遣いに気をつけることを学んだ
			言葉を伝える順番やイントネーションでも話のニュアンスが異なるって来るため言葉の選び方や伝え方が重要であると学んだ
	相手を尊重した言葉を使う	4	本人の気持ちを第一に考え、尊重することがよりよい関わりにつながっていくことを学んだ
			自尊心を傷つけないための説明や言葉使いを考えた
	他の学生のコミュニケーションから学ぶ	2	他の学生のコミュニケーションを見学し、相手のいったことを繰り返したり、相づちを返すことで高齢者が話しやすい環境をつくる事が出来たと学んだ
地域で生活する高齢者の理解	元気な高齢者の生活を知る	4	何にでも挑戦しようとする姿から高齢者観がポジティブな物に変わった
			地域で生活している高齢者は健康で過ごしている人が多く先入観を持って高齢者を認識してしまっている事に気づくことが出来た
	高齢者の生活歴を知る	3	高齢者の歩んできた生活様式、生活習慣などの生活歴を知ることが必要である
			病気だけではなく、その人の生き方、生活環境、加齢の影響などに目を向けることの大切さが理解できた
高齢者に対する看護の理解	予防的な関わり方を知る	6	問題に着目しがちだが、人それぞれ生活の仕方があり、その人の強みや良い部分にも着目する事の大切さを学んだ
			高齢者の出来ない部分でなく、出来る部分を引き出していくことが自尊心の向上につながることを実感した
	生活を支援する看護について知る	6	治療を目指すのではなく、身体能力を維持した予防的な関わりをしていくことが大切であると学んだ
			生活習慣の改善は最初から大きな行動変容を求めるのではなく値小さな事から初めてだんだんと改善へつなげていく事が大切であると学んだ
	グループワークで看護過程の学びを深める	2	看護師は入院中など病院内だけでなく、自宅や施設に帰った後でもその人が安心してその人らしく生活できるような支援を継続して行う必要があることを学んだ
			現在の生活から対象者にとってこれから何が必要であるか現在の生活も重視しながら支援していく必要がある事を学んだ
			看護過程をグループで共有することで私にはない視点を学ぶことが出来た
			グループで意見を出し合いながら提案を考えることが出来た

1. 高齢者とのコミュニケーションスキルの理解

本学の高齢者看護学実習の目的は「加齢に伴う変化や健康障害により、施設で生活する高齢者とその家族の特性を理解し、より良い生活支援の為に必要な看護の知識・技術・態度を修得する」ことを目的としている。高齢者へオンラインインタビューを行うという限られた機会であっても、高齢者の自尊心を尊重しコミュニケーションをはかるという目標に対する学びの機会を確保することが出来たと考える。さらに必要な情報を高齢者から引き出すためには、疾患に対する知識を基に言葉を厳選し、かつ高齢者に伝わる言葉で質問するというコミュニケーションスキルについて学習する機会にもなった。今回の実習において、インタビューやプレゼンテーションを通した高齢者からの予期しない反応や返答に対して、臨機応変に対応することを経験する機会となり「相手の表情や言動、声のトーンなどを観察する事で相手の考えや強みを理解することが出来た」や、「言葉を伝える順番やイントネーションでも話のニュアンスが異なるって来るため言葉の選び方や伝え方が重要であると学んだ」などのように、コミュニケーションとは流動的で双方向の物事であることを体験し、紙上事例では体験できない貴重な学びとなったのではないかと考える。さらに「本人の気持ちを第一に考え、尊重することがよりよい関わりにつながっていくことを学んだ」な

どのように、高齢者に対する配慮や言葉選びなど、オンライン実習という形態ではあるが、実際の高齢者と接することで得られた学びである。高齢者の自尊心を尊重しコミュニケーションをはかるといった目標に対して経験する機会を確保することが出来たと考える。

さらに、臨地実習の経験が少ない学生にとって「他の学生のコミュニケーションを見学し、相手のいったことを繰り返したり、相づちを返すことで高齢者が話しやすい環境をつくることが出来ると学んだ」のように、他の学生が高齢者と関わる様子から、コミュニケーションに関する学びを得ることが出来ていた。

2. 地域で生活する高齢者の理解

インタビューに協力いただいた高齢者はスポーツやボランティア活動に意欲的に取り組み、スマートフォンやタブレットを使用するスキルを持っていた。「何にでも挑戦しようとする姿から高齢者観がポジティブな物に変わった」と述べているように、学生にとって高齢者の多様性について理解する機会となった。さらに、生活上の課題を抽出する過程で高齢者の生き方や価値観に触れ、「問題に着目しがちだが、人それぞれ生活の仕方があり、その人の強みや良い部分にも着目する事の大切さを学んだ」と述べているように、高齢者の発言を聞いて老年期における「人生の統合」の意味についても実感できたのではないだろうか。「新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議報告書³⁾」において、臨地実習の代替の際には療養経験のある住民を模擬患者として迎え入れるなどの地域資源活用についても推奨されている。今後も地域で暮らす高齢者との関わりを視野にいれて行くことが望ましいと考える。

3. 高齢者看護に対する理解

オンラインでの関わりであっても、インタビュー内容から「現在の生活から対象者にとってこれから何が必要であるか、現在の生活も重視しながら支援していく必要性がある事を学んだ」と述べているように、今後高齢者に起こり得る状態を予測する臨床判断能力や、健康教育を行うという看護の責務、地域で暮らす高齢者の自立した生活の継続を支援する地域包括ケアについて考察する機会となった。

4. グループの共同学習・情報通信技術(ICT)の活用

学生たちは、実習スケジュールの一連のプログラムの中でディスカッションを重ね、情報通信技術(ICT)に関する自分達の強みも生かしながら学びを共有していた。Googleドライブを活用し、実習時間外や休日の自宅においても、メンバーが同時にドキュメントやスライドにアクセスし健康教育の内容に関する意見交換を活発に行っていた。これらの過程を通してICTを活用するための基礎的能力を養う学びともなり、学生たちはチームワークや共同学習の楽しさややりがいも感じていた。

田中ら⁶⁾は、学内実習は「緊張を感じる病院実習と異なり、一つ一つ丁寧に学習し学生の思考を育てる」という学習の効果を挙げている。学内実習においてグループで一人の高齢者の看護過程の展開をするということから「看護過程をグループで共有することで私にはない視点を学ぶことが出来た」と述べているように、学内実習においても学生の思考を育てることも出来たと考える。

V. 結論

1. Covid-19禍における高齢者看護学実習Ⅱで学生が得た学びは、【高齢者とのコミュニケーションスキルの理解】 【地域で生活する高齢者の理解】 【高齢者看護に対する理解】であった。

2. 高齢者看護学実習ⅡにおけるGoogleドライブを活用した共同学習は、情報通信技術（ICT）を活用するための基礎的能力を養い、学生の思考を育てる機会となった。

Ⅵ. 今後の課題

「新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議報告書³⁾」において、臨地実習の代替の際には、シミュレーション教育のシナリオ作りにどれだけ現場のリアリティを組み込むことができるか、また、ロールプレイにおいては、どれだけその者に成りきって臨場感を作り出すことができるかといった、現場のリアリティを組み込むという課題も明らかにされている。今回の実習において、受け持ちの高齢者の数年後を想定した日常生活の援助技術のシミュレーション演習を行ったが、看護学生にとっては看護の対象として実際の高齢者が存在するため、加齢変化のイメージ化が促進され、リアリティを感じられる演習につながったと考える。

今回は感染拡大の状況下の実習であったため、健康教育の対象のほとんどが自らオンライン接続ができる前期高齢者に限定された。今後は高齢者の家族へオンライン接続を依頼し、後期高齢者とその家族との関わりや、後期高齢者の健康課題も学ぶことが出来るような方法も計画できるのではないだろうか。また、高齢者とその家族だけではなく高齢者を支援する専門職と連携する機会も検討することにより多職種連携について考察する学習となると考える。今回の学生の学びはあくまでもCovid-19禍における高齢者看護学実習Ⅱの学びである為、本来の臨地実習で得られる学びとの違いについてまでの検証はしていない。今後もWITHコロナの状況が続いていく事が予測される。今回の学生の学びを踏まえ、感染拡大により臨地での実習が困難な状況下でも看護学生が高齢者に関わる機会を確保していくことを検討していきたいと考える。なお、本研究の利益相反は無い。

引用文献

- 1) 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について文部科学省及び厚生労働省による事務連絡（令和2年2月28日）
<https://www.mhlw.go.jp/content/000603666.pdf>（2022.11.13 14:00アクセス）
- 2) 第1波～第7波 感染者数
<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/entire/>（2022.9.22 10:00アクセス）
- 3) 新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議 報告書 看護系大学における臨地実習の教育の質の維持・向上について。令和3年（2021年）6月8日。文部科学省。
https://www.mext.go.jp/content/20210608-mxt_igaku-000015851_0.pdf（2022.11.13 14:00アクセス）
- 4) 舟島なをみ(20)看護学教育における授業展開 第2版 質の高い講義・演習・実習の実現に向けて看護教育における授業展開－質の高い講義・演習・実習の実現に向けて－。医学書院。
- 5) 看護基礎教育検討会報告書 令和元年 10 月 15 日
<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>（2022.9.22 10:00アクセス）
- 6) 田中さおり，伊織光恵，日沼千尋(20)学内実習プログラムで実施した小児看護学実習における学生の学び。天使大学紀要21(2)15-31。

2022年12月26日 受理
了徳寺大学研究紀要第17号